

自然音の音楽的な聞こえについて

—— L・マイヤーの音楽的期待の観点から

岡崎 峻 (無所属)

環境音を耳にすると、私たちは普段、それを特定の事物や出来事の表れとして認識する。しかし、環境音はときに音楽のようにも聞かれる。すなわち、音の表面的な響きを意識の前景において聞き、それを美的にとらえるのである。このような聞こえは、人工的な物音よりも動物の鳴き声などの自然音によって生じやすいことが知られている。

過去半世紀の間に発展したサウンドスケープ論やサウンドアート論は、この能力を積極的に評価する文脈を形成したが、実践的な提案や表現活動に焦点を当てていたため、その本質に関して十分な議論が行われてきたわけではなかった。一方、聴覚的对象に関する美学の話題は音楽に偏しており、自然音の美に関する研究はほとんど手つかずの状態にある。そこで本発表では、現代の実践的アプローチと伝統的な美学をつなぐ試みとして、自然音が音楽的に聞こえる要因に関する理論的な考察を行う。

音楽的な自然音の問題は、ハンスリックの『音楽美論』をはじめとする音楽美学の文献で古くから言及されてきた。そうした文脈では、安定したピッチや音階的な動き、秩序的な構造といった、一種の音楽的形式に由来するアナロジーとみなす考えが支配的であった。しかし、様々な具体例を調査すると、この考えは正確でないことがわかる。なぜなら、たとえばコココの鳴き声やニベ類のコーラスのように、比較的単純で秩序に乏しい自然音が深い音楽的印象を与えるケースは珍しくないからである。

本発表では、L・マイヤーの提唱した音楽的期待に関する理論を用いて、こうした聞こえの問題を再解釈する。特定の音楽スタイルへの習熟が音楽的期待を形成するように、私たちは日々の生活の中で音環境の構成や音の発生機構などに関する多様なスキーマを獲得していく。これらのスキーマは、日常的な音の経験における、マイヤーがいうところの「期待」として作用する。したがって、そこから逸脱した音は何であれ、聞き手の聴覚的な注意を高め、情緒反応を喚起する可能性を持つ。

一方、C・フェールズの音色異常に関する研究が示すように、聞き手の聴覚的スキーマから逸脱した異常な音響を演出することは、音楽家が周囲の関心を引くための技法としてごく一般的である。この点から、際立った逸脱性を有する自然音を聞く経験は、聞き手の認識において音楽の概念に関連づけられる可能性がある。

以上の論点に基づき、本発表では、自然音の音楽的な聞こえは、音楽との類似ではなく、自然との対比から生じるという仮説を提案する。この対比は、ピッチや音階、構造だけでなく、音色や音量、対象に関する知識、音のカテゴリの判断、聴取の文脈、テクノロジーの媒介といった諸条件の組み合わせによって形成される。したがって、それは音楽的形式に基づく単純なアナロジーではなく、音を聞く行為を意味づける多層的な認識構造に基づく、より複雑な反応を示していると考えられる。